

121. 1 型糖尿病の高齢患者を“サポート”～独居の高齢糖尿病患者健康支援サービス～

認定特定非営利活動法人日本 IDDM ネットワーク

井上 龍夫

概要

全国で約 12 万人の 1 型糖尿病患者は医療の進歩により高齢化が進み、孤立、治療への不安、訪問看護頻度の不足、施設入居拒否、筋力低下などの課題があります。しかしながら、この病気ならではの老後の支援は何も無く、相談できる場所也没有せん。

こうした課題を解決するため①高齢患者の現状を詳しく把握する交流会の開催②高齢患者を支援する同じ患者のサポーター「いちがたサポーター」の養成③全国各地の地域患者・家族会が高齢患者支援に取り組む可能性調査と当該患者・家族会からの人材発掘（いちがたサポーター候補スカウト）④高齢患者にとって必要な情報を網羅した専用 WEB ページやパンフレット作成に取り組みました。

高齢患者からは、特に都会の患者同士の交流の場を求められ、ニーズの高さを強く認識できました。

患者の受け入れ施設が少ないという声には、調査の結果、全国で約 1000 の施設が受け入れ可能とされていました。しかし、地方に行くほど施設が少なく、今回作成した「高齢 1 型糖尿病患者対応マニュアル」を活用し、受け入れ拡大に向けて周知していきます。

今回「いちがたサポーター」10 名が誕生し、活動を開始していますが、参加費だけで継続することは困難です。今後の高齢患者支援事業は企業スポンサー資金を加えて、継続して行きます。

私たちのこうした活動は 3 年連続の赤字であり、今回の助成がなければこの事業は不可能でした。このたび、患者・家族の自助、共助社会の基盤整備ができたことにつきて、心から感謝申し上げます。

背景および目的

全国に 12 万人いる 1 型糖尿病患者は医療の進歩により高齢化が進み、孤立、治療への不安、訪問看護頻度の不足、施設入居拒否、筋力低下などの課題が指摘されていました。

特に老後の不安は年齢に関係なく患者・家族誰もが胸に抱いていますが、これまでこの病気ならではの老後の支援は何も無く、相談できる場所也没有せん。

こうした課題を解決するため、当初計画を見直しながら 4 つの事業を柱に取り組むことにしました。

方法

1 高齢患者のこれからを考える交流会の開催

インスリン補充が必要な概ね 50 歳以上の患者とその家族を対象に東京都内、大阪市、札幌市、仙台市、熊本市、大分市等、全国各地で開催し現場の声を把握しました。

2 高齢の 1 型糖尿病患者を支援する同じ 1 型糖尿病患者のサポーター「いちがたサポーター」を養成

高齢患者のこれからを考える交流会や全国各地の地域患者・家族会へのヒアリング等の中で人材を発掘し、10 名の第 1 期「いちがたサポーター」を養成しました。

3 全国各地の地域患者・家族会へのヒアリング

全国各地の地域患者・家族会に新たな事業として高齢患者支援に取り組む意思がないか、現地を訪問し、その可能性調査や当該患者・家族会からの人材発掘（いちがたサポーターとしてスカウト）に取り組みました。

4 高齢患者専用の WEB ページの作成

https://japan-iddm.net/kourei_1gata/

【掲載内容】

- ①高齢患者に向けた糖尿病専門医からの療養上の留意点動画
- ②高齢患者の健康増進のための若い患者によるエクササイズ動画
- ③今後取り組んでいく高齢患者交流会のお知らせ
- ④高齢患者の体験談動画
- ⑤インスリンの打ち忘れがないかを確認することができるスマートセンサーといったお役立ちグッズのご紹介
- ⑥高齢患者の対応ができる介護施設の紹介
- ⑦糖尿病専門医による介護施設職員のための患者対応マニュアル
- ⑧「いちがたサポーター」募集
- ⑨高齢患者に必要な情報を掲載したパンフレット「1型糖尿病とともに歩むー高齢の患者さんへー」
- ⑩365 日対応する相談窓口



図 1. 介護施設職員のための患者対応マニュアル



図2.「1型糖尿病とともに歩む」

高齢者に必要な情報を掲載したパンフレット

結果および考察

当初の計画では、「いちがたサポーター」を養成し戸別訪問まで想定していましたが、それには高齢患者から抵抗を示されました。一方で対面で交流する場を強く求められました。地域コミュニティとのつながりではなく高齢患者同士のコミュニティづくりを求められました。特に東京や大阪といった都会のニーズが高く、地方では地域コミュニティもあり、都会を優先に対面での交流会を増やしていくことが重要と認識しました。

高齢患者を受け入れてくれる施設が少ないという声が多く寄せられましたが、介護施設事業所関係団体に相談し、2つの施設紹介会社にたどりつき、検索した結果、約1000か所の施設が受け入れ可能とされていたのは驚きでした。しかしながら、地方に行くほど受け入れ施設が少ないことが課題であり、今回作成した糖尿病専門医による「介護事業所に勤務される方のための高齢1型糖尿病患者対応マニュアル」を活用し、介護施設での受け入れ拡大に向けて周知してまいります。

また、「高齢患者のこれからを考える交流会」を通して、高齢患者が日本で受けられる最新医療や1型糖尿病根絶に向けた様々な研究が進んでいることを驚くほど知らないという現状があり、高齢患者向けにパンフレット「1型糖尿病とともに歩む—高齢の患者さんへ」や高齢患者専用のホームページを作成できたので、これらを活用し情報提供を強化して行きます。

残念ながら全国各地の地域患者・家族会には、本件の課題認識はあっても高齢患者を支援するまでの余力がないことが判明しました。

今回「いちがたサポーター」1期生、10名が誕生し、その1期生が、早速交流会を企画してくれていますが、当日の参加費だけで継続することは困難な状況です。現在、企業1社が、こうした高齢患者支援事業のスポンサーとして肯定的な反応を示されており、何としてもスポンサーになっていただき、交流会の開催やいずれ必要となると思われる個別訪問サービスにつなげていきたいと思っています。しかしながら、高齢者がサービス料金まで支払う意識までには至らず「いちがたサポーター」が職業となる目途は立っておりません。

今回の高齢の1型糖尿病患者支援は、団塊の世代が後期高齢者となる2025年までに何としても実現したいと思っていました。しかしながら、私たちの活動への支援の大半が1型糖尿病根絶のための研究費助成のための寄

付であり、それ以外の活動（一般会計）は3年連続の赤字であり、今回の助成がなければこの高齢患者支援の基盤整備は不可能でした。

2025年問題のこの時期に助成をいただき、高齢の1型糖尿病患者の課題を明確に把握でき、私たち患者・家族の自助、共助社会の構築につなげる基盤整備ができたことにつきまして、三菱財団様には心から感謝申し上げます。

（完）

発表論文

- 1) 無し

引用文献

- 1) 「いちがた高齢患者支援サポーター養成研修テキスト」における引用・参考文献
○「難病ピア・サポーター養成研修テキスト（基礎・応用編）」
厚生労働行政推進調査事業補助金（難治性疾患等政策研究事業（難治性疾患政策研究事業））「難病患者の総合的支援体制に関する研究」班 研究代表者 小森哲夫
- 2) ○難病療養者のこころ 心理臨床と生命倫理の視点から（創元社） 鎌田依里／峯村優一
- 3) ○国立国際医療研究センター 糖尿病情報センター
- 4) ○いちがた高齢患者支援サポーター養成研修 相談の心得—臨床心理士の立場から— 2025年2月11日配布資料 鎌田依里
- 5) ○糖尿病診療ガイドライン 2019：日本糖尿病学会編・著